

メロン「ハニーキング1号」の育成経過とその特性

三浦 孝雄・萩生田邦雄
(山形県立園芸試験場)

1 はじめに

山形県におけるビニールハウスの面積は年々増加し100haを越すようになり、栽培される作物は、春作ではキュウリ・トマト、秋作ではキュウリが主体となっている。しかし、生産物の価格は施設費や生産費の高騰に比べ数年前とあまり変りなく、更に交通の発展や他産地の増大で産地間の競争が激しくなり、春作を重点としてきた本県のハウス経営は難しくなってきた。このような状況から、立地条件を生かし、経営的にも有利な作物、作型として、抑制メロンの栽培を取り上げた。しかし、抑制栽培は育苗から開花までは高温に、着果後は逆にだんだん低温に向かうことから、品種の選定が難しい。アールスフェボリット(以下、アールスと略す)の各種系統及び類似品種について、地床栽培でこの作型に適する品種の検討を行ったが、良い結果は得られなかった。

以上の理由から品種の育成を開始し、ほぼ目的に添う系統が得られたので、これを「ハニーキング1号」と命名し、普及に移した。

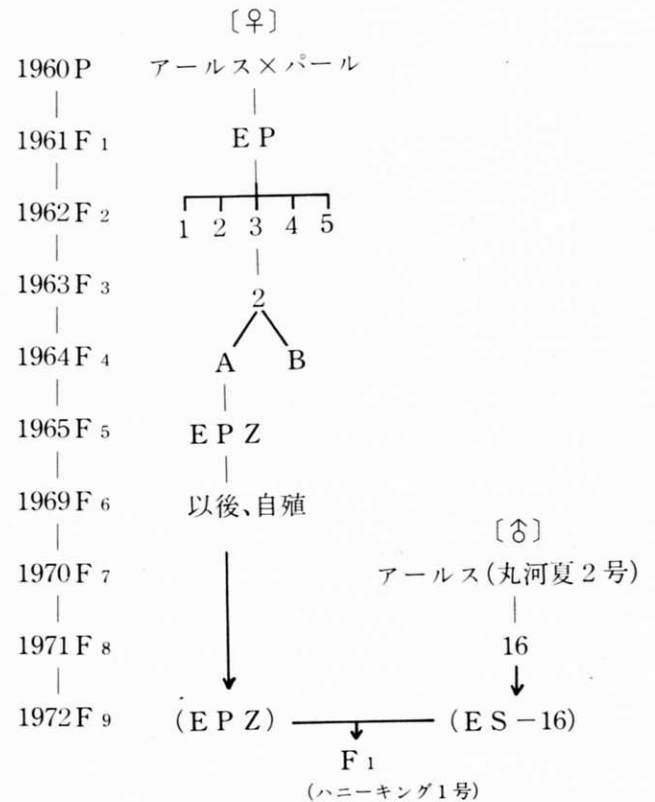
2 育成目標

本県におけるハウス経営では、春作を6月下旬～7月上旬で打ち切る作型が多い。それで6月下旬にメロンをは種して、7月上～中旬に定植し、9月下旬～10月中旬に収穫する作型は普及性が高い。更にこの作型は無暖房でも栽培できるので経営的にも経費がかからず、極めて有利である。しかし、この作型は気温が育苗期から開花(交配)まで高くなるのに反し、開花から収穫までは低くなり、全く逆の条件となるため問題点も多いが、

- 1 徒長的な生育をしないこと。
- 2 雌花の着生が良いこと。
- 3 果実はネットの発生が良く、外観、果肉ともアールスに似ていること。
- 4 糖度は最低13度以上あること、などの条件を備えた、10月上～中旬収穫のハウス地床栽培用メロンを目的とした。

3 育成経過

「ハニーキング1号」は、EPZ×ES-16のF₁で、育成経過は第1図に示したとおりである。



第1図 ハニーキング1号の育成経過

母親(EPZ): 1960年、山形農試において、アールスにパールを交配し、以後、果皮、果肉とも緑色のものについて、地床栽培で選抜を繰り返し、1965年(F₁)ではほぼ実用的な固定をみた。その後一時中断したが、1969年から山形園試において自殖を繰り返し、1972年でF₉世代になっている。草勢は、初期～中期は旺盛であるが、収穫期になるとやや弱くなる。雌花は高温でも良く着生するが、側枝の出がやや弱い。果実は1.3～1.5kgでやや扁平～球形となる。ネットは良く発生するが盛上りや太さの揃いがやや劣る。果皮は濃灰緑色でアールスより緑色が濃い。糖度は13～14度で安定し、肉質は良い。

父親(ES-16): 1970年、静岡農試から導入したアールス夏系(丸河夏2号)。生育は旺盛であるが節

間が短く、雌花の着生が良い。果実はやや腰高で、肉質はやや粗いが糖度は13度ぐらいで安定している。

ネットは良く発生するが盛上りがやや劣る。なお、果形の点で固定度がやや低かったため、以後、球形のものについて自殖を行い、固定化に努めた。父親としての最初のF₁検定は1972年度である。

4 特 性

特性は第1表のとおりである。6月末～7月初めのは種で、10月上～中旬収穫のハウス地床栽培に適する。生育は夏系4号や秋系2号のように早くはないが、父親の丸河夏2号よりは早く、節間もわずかに長い。

第1表 ハニーキング1号の特性調査 (1972)

品 種 (系統)	生 育 (8月5日)		雌花着生率 (10~16節)	果 重	果 径 比 (よこ/たて)	果 溝 の 発 生 度	ネットの発生	
	草 丈	葉 数					密 度	盛 上 り
夏系1号の2	84 ^{cm}	14.3 ^枚	77.1%	1,620 ^g	0.99	1.4	2.8	2.3
夏系4号	115	17.1	60.0	1,490	0.99	1.1	1.8	2.4
夏系7号	61	12.9	88.6	1,180	0.93	0	3.0	2.7
夏系8号	101	16.9	51.4	1,440	0.93	0.6	2.5	2.4
秋系2号	113	18.0	48.6	1,670	0.97	1.1	2.8	2.4
伊藤系	101	16.6	88.6	1,880	1.00	1.6	0.8	1.8
ES1-2×ES-16F ₁	107	17.2	74.3	1,520	0.92	0.4	3.1	0.4
ES4×ES-16F ₁	97	16.4	67.1	1,570	0.93	0.1	3.3	2.5
ES-16	71	14.8	81.4	1,310	0.94	0	3.8	2.9
ハニーキング1号	95	17.3	78.6	1,570	0.95	0.0	4.0	2.3

品 種 (系統)	果肉の厚さ	花痕の 大きさ	糖 度			調査果数
			平 均	最 高	最 低	
夏系1号の2	3.9 ^{cm}	1.4 ^{cm}	14.3%	15.0%	13.6%	20
夏系4号	4.0	1.6	13.9	15.0	12.4	20
夏系7号	3.4	2.2	12.1	13.6	11.0	18
夏系8号	3.7	1.5	13.1	14.4	11.2	19
秋系2号	4.1	1.8	13.7	14.6	13.0	20
伊藤系	4.3	1.7	13.1	14.4	11.0	20
ES1-2×ES-16F ₁	3.7	1.4	13.5	15.0	11.0	14
ES4×ES-16F ₁	3.7	1.6	13.6	14.2	13.0	18
ES-16	3.7	1.7	13.3	14.6	12.2	20
ハニーキング1号	4.0	1.5	13.9	15.2	13.2	20

- 注. 1) は種6月27日, 定植7月15日
 2) 果溝の発生度は最高3, 発生のないもの0の4段階
 3) ネットの発生は最高5, 最低1の5段階
 4) 果肉の厚さ及び糖度は果実の赤道面を測定
 5) 糖度の最高, 最低は調査果中の最高, 最低

雌花は高温期でも良く着生するが、夏系7号に比べるとやや劣る。

果実は夏系7号に比べて肥大が良く、1.4~1.6kgぐらいであるが、果実の肥大期に高温が続くと大玉になりやすい。果形は球形～やや腰高であるが、いつまでも肥大させるとやや偏平果になるので、肥大後期のかん水は控え目にする。果皮はアールズに比べ緑色がやや濃いので、薬害を防ぎ、また、ネット発生上からの新聞紙などを用いた袋かけは必ず行う必要がある。なお、果梗部は最後まで緑色が残る。

ネットは良く発生するが、盛上りがやや悪く、また、ネット発生初期にかん水量が多いと大割れして不揃いになることがあるので、多すぎないように注意する。

果溝は、夏系1号の2や夏系4号では発生しやすいが、ハニーキング1号はほとんど発生しない。

果肉の厚さは4cm程度である。果肉色は黄緑で、肉質ともアールズに似ている。

花痕部の大きさは最大直径で1.5cmぐらいで、夏系7号のように大きくはない。

成熟日数は、6月下旬は種、8月10日ころの開花で50~52日ぐらいである。糖度は平均14度であるが、最低でも13度以上あり、安定している。

耐病性は特にないので、ウィルス病、つる割れ病、うどんこ病、キャンカーなどに対しては十分な管理、対策を行う必要がある。

5 普 及 地 帯

以上のような特性から、土壌別の栽培適応性については検討していないが、県内のハウス栽培地帯の地床栽培で普及性があると考えられる。